

魚なら好きに料理をしてくれるというので頼んだが、刺身と吸物、それに煮つけである。ついでに地酒のお銚子も添えて貰うことにしたの成中すまでもない。やがて運ばれてきた料理は家庭料理そのもの。刺身はチヌ、葱物がメバルで吸物がカワハギと、それがまたまことにうまいのである。今朝獲れたばかりの魚だという。すつかり嬉しく、良い気持ちになっていると、時間たとの知らせである。

舟に乗ってみてまたおどろいた。どこから現われたのか三人の先客が居たのである。結局私達と合わせて六名。釣船のような屋形船の真中に木あくが組まれている、その底にガラスが張ってある。その下にはぶく濁って見える港の海は汚なかつた。

やがて舟は岸と離れた。風もなくすばらしいお天気である。乗っているだけでも気持ちが良くて楽しい。やがて入江を出ると、先ず前方の島に向かって直進。ガラスの下には青々と取りとめのない海が深々と続いている。

何かの養殖でもしているのか、丸い浮きが無数に並んで浮んでいるところを避けて、小さい島の間を走り始める頃から、次第に明るい海底が見えてき始めた。浅くなつてきたのである。

岸を離れてから三十分ぐらいか、舟は急に速度を落としました。あらためて下をのぞいてみておどろいた。ガラス一面が見事な珊瑚礁なのである。皆日本木わくにかじりついた。

平べったく、様々な形に開いたようなそればかりで、海の底に咲いた大きな花のようである。舟が向きを変えて、波を透す陽の光がその上で揺れる度に、青・緑・白のその花は、夫々に変わった輝きを見せてくれるのである。

無数の魚が泳いでいる。熱帯魚のようには鮮やかな原色の魚が美しい。時々大きな奴が威張ってゆつくりと通り過ぎる。

砂の上に、奇妙な形の生き物が動いていたと云ってはいく。喚声が高くなる。

海藻がゆつくり揺れている。誰もが見入っているように、ガラスの下に展開する夢のような世界に見入っている。

いつまで眺めていてもおどろかない、すばらしい美しさなのである。

大変なものがあるとおどろいた。

五、六年も怒った今でさえ、その時の印象は鮮かに残っているほどである。

その町の名を蒲江町という。
(住居市書第一東京郡大田又田園調布一四六六)

参拝記

丸市尾富尾神社の夜神楽

大分県指定文化財
蒲江丸市尾神楽を拝観して

会員 羽 柴 弘

青みてぐら白帯帛をたぶさに枝を折り
かざしう左へは開く天岩戸 (富尾神社神歌)

十一月二十一日は、蒲江町丸市尾に鎮座する富尾神社の冬祭で、その前夜、県指定の蒲江神楽の奉納がある。

いので、二三の会員に連絡をとり、夕方から丸市尾に
出掛けた。

私のこの蒲江神楽についての先入知識は、やはり岩戸
神楽の部類に入るものとしていたが、なるほど、^{彦の}岩戸
の神話にもとづく神楽であることには相違なかった。然
し佐伯の農村山村で旧正月農閑の時期に、村里の娯楽と
して巡業している一般的な岩戸神楽とは、全然異質のも
のであった。

本質的には、丸市尾浦の氏神富尾神社の冬祭にあたり、
氏子中から奉納される神賑わいの行事である。霜月(陰
曆十一月)だが今日陽曆による)の二十一日、この秋収穫
の新穀とともに海山のくさぐさのものを献げて、一年の
収穫を感謝するものである。そして神霊をお慰めする神
賑わいとして奉納されるこの神楽は、佐伯神楽のように
神官・祭員によってするものでなく、富尾神社の氏子た
ちが舞楽のすべてを奉仕するという、独自の伝統をすべ
に数百年うけついで今日に至っている。つまり興業でな
く、神楽に奉仕する人々はすべて無報酬であるという。
しかも笛・太鼓をはじめ、十八番の神楽は特別な家によ
って伝習され、親が子に教え、子が更に伝えるように、
連綿と守り継がれていくという。

富尾神社の主神は、桐牟礼の城主佐伯薩摩守惟治^{これら}であ
る。大永七年(一五三〇)惟治は主家大友兼鑑に疑われ、居
城梅牟礼をすて日向に落ち、三川内から峠を越して丸
市尾に出、名護屋崎から海上伊予の地に逃れようとして果
せなかつた。止むなく再び尾根を登って遠く高千穂と志し
たが、武運に恵まれず尾高知の峯で憤死した方である。
したがって、単なる収穫感謝の秋祭りや零圃気だけでな
く、高千穂の地にゆかり深い天の岩戸の神話にもとづく
神楽を奉納して、祭神の怨念を慰めようとする村人たちが

の、暗黒のいのりごころが伺えるというのは、私の思い
過こしであるうか。

今夜はその宵祭、ヨドである。日暮ころから三々五々
村人達が打ち連れて参拜、七時すぎには拜殿(ばいばな)
る。
拜殿内上座に近く二枚の筵^{むしろ}が敷かれ、その上で神楽は
舞われる。首は屋外で神楽が舞われていた、その形をこ
わさずに守っているのだという。鳴り物はその横に座を
とり、笛の音が寒空にひびき、太鼓の音が社殿をゆさぶ
るように鳴りとどろく。

神楽は一番の「地堅め」から、最後の「戸取り」まで十八
番あり、ほぼ天の岩戸の神話を、順をおうて舞楽で演出
するものであつた。粉装は次々と各種の仮面をつけ、袴
や陣羽織目きらびやかな金襴^{えんらん}を用い、手には鈴・御幣・
太刀などを持つのであるが、珍らしいものは「面棒」と
呼ぶ長さ一拵ほどの棒である。(因参照)

色紙で包んだらに巻き、両端は色紙の花房をつけてあ
る。これを「貴神」と「荒神」がもって舞う。これは一体何
をあらわすものであろうか。殊に終りに近い「戸取り」で
は、^{狭か}狭か男命と思われれる神が、この面棒高々とかがげ、
ゆっくりまわしながら舞う神楽の所作は、まことに異極
で壯観である。これは神々の、天^{あま}
照大神への随順また願望の心を
あらわすものであろうまいか。

十八番次々に奉納されるのであ
るが、いずれも四方に舞い順逆に
よるので、一番というのが十五分
から二十分、中には二十七分から
三十分を要するので、この夜神楽
の終りのは十二時を過ぎるといふ。

面棒

(海江神楽祭具)



時間は分かるが決して退屈することなく、次々と展開する古事ドラマは私の心をとりこにさせてはなさない。

夜神楽也 拜殿にさする藤の冷え

天照大神が、御弟素戔嗚尊の乱暴を避け、天の岩戸を閉じて籠もられた。この為暗黒の国土にさまざまな災いが起こり、八百萬の神々がさまざまの思いとわざを捧げて大神の出現を待望した。これは歴史でなく神話として、大きくから託記にしろされ、民族の信仰のように今日に伝承されて来た。その最上の経緯がこの岩戸神楽ではなかつたか。

天の安の河原に於ける神々たちの謀議、太玉命による鏡や玉の用意、天鈿女的命の舞、柴火の行事、すべては大神の君臨を求め、民衆(神々)の悲願であった。

このようなことを思う間も神楽はつづいた。そして最後は手力男命による戸開き、大神の出現となるのである。普通の岩戸神楽では、勇壮な所作で手力男の神が扉を開き、襖を脊にして乱舞する、少年の目に岩戸神楽を見ながら眼底にはその様に残り、法蓮を張られた祭壇にかがやいているお燈明と、会衆は榊科で拝礼してフィナーレ(終幕)となるのである。

ここ九市辰神楽では、いささかちがう。最後の「戸取」で、手力男命はすばらしく力に満ちた舞をくり返しながら拜殿正面にしろえた天の岩戸に向って、後ろ向きに岩戸にせまり、ついに扉をあける。約二十五分間、前記の面棒をくりくりとまわしながら、この寒夜、汗をにじませながらの熱演である。私たちははじめて見る異様な雰囲気、ダイナミックな神楽に圧倒されて、息を呑みながら見つめたのであった。

天の岩戸から、神々の出現で神楽は最高潮に達した。

天照大神を先登に、十数柱の神々(実際は八百萬の神々)が、ここを先遣と吹き鳴らす笛、打ち鳴らす太鼓に合せ舞い踊る。——私はこのように拝したのであった。

霜夜こめ 岩戸にせまる手力男
あなかしこ 富辰の宮の冬まつり

時計はとうに十二時をまわっている。拜殿に(一)ばいであった村人、氏子の方々はそれそれ拝礼して退出する。私たちは深い感動を胸に、富辰神社の社殿を後にし、深夜の九市尾から帰途についた。(おわり)

岩戸神楽と大蛇退治について

——若干の反響と見解—— 羽 柴 弘

○佐伯地方の農山村で、春先(昔なら旧正月、今なら三三月)岩戸神楽の催しがあって、かつてはなかなか賑わっていた。今も、宇目新から直川・庄匠の農村で行われている。

○佐伯にも一座があった。山田氏がそれを守っている。要望に応じて、興業して、時折り史談会も打ち建てて見学に行く。

○いさ思ふことだが、神話にもつくものとして、粉装や小道具が、いさある。女性の長褌絆をそのままで舞が出る。淡色か白色の衣裳にならない。か。メリンス(モス)のしかもはでながらのはいいたくない。

○次は刀である。近世の日本刀では困る。神話は歴史ではないが、ゆき歴史性ある考証に立って、直刀は使えないものだろうか。

○次に岩戸神楽なら、蒲江神楽のように天岩戸の神話一本にしろばれないものか。か、八岐の大蛇(たまたのおろち)は、高天原を追われた素戔嗚命が、出雲国でやったことで、天、岩戸の神話からは少々は又出ている。

○そしてこれも、今の大蛇は火焔を吹きまわり煙をもうもうと出し左へ、私は少年の日に見左米俵(もみろ入りの)の上にくくりつけた葎草の大蛇を斬る、葎草など全然使わない、原始的な演出が賛成である。(以上ご参考になれば幸いです。)